彙報

■起信論の眞僞問題

『大乘起信論』が果して龍樹以前の馬鳴の作であるや否やに就ては夙に一般に疑はれてゐるところであるが、曩に望月信亨氏は『宗教界』第十四卷一號に於て此の起信論は龍樹以前の作にあらずと云ふに止らずして支那に於て僞作せられたものであるこの說を發表せられた。之に對して羽溪了諦氏が『哲學研究』第三十二、三號に於て反對意見として、印度撰述ならざることを述べられ更に望月氏の反駁があつたのである。然るに最近、昨年十月、十二月の『哲學雜誌』に村上專精博士は「大乘起信論の史的考察」の論文に於て支那撰述說の寧ろ取るべき意見を發表せられたが、之れに對して常盤大定氏は本年一月の『哲學雜誌』にて「大乘起信論の眞僞問題」として、印度撰述說を出された。起信論が古來廣く講學せられ來りし書なるにもよりて、このことは多少問題になつてゐるので、今、學界消息の一として簡單にその最近の論議を紹介することゝする。

蓋し起信論の支那撰述說を生むに至りし史料的根據は、一、隋の法經の『衆經目錄』に於て此論を疑惑部に收めたること、二、唐の惠均(均正)がその『四論玄義記』第十に於て、北地諸論師の說として起信論は馬鳴の作にあらずして地論師が僞作假托せるものであるこの說を揭げてゐるこの二であると云つてよい。後者の四論玄義は今僅かに缺本が續藏中に收められてゐるのみで、右の說は見出す能はざれども、珍海の『三論玄疏文義要』及び湛睿の『起信論決疑抄』に引用せられてゐるところである。村上博士は十月號に於て此より立論して、起信論の內容は、その教義に於て又その立論の整備せることに於て到底龍樹無著以前の說と爲すことは出來ず、寧ろ支那に於ける地論家攝論家の說と深き關係を有するものと考へられ、而して地論師は南北兩道に派を分ちて爭うたが、北道派はその教義の中心たる阿黎耶識を以て妄識と爲し、南道派は之を眞識即ち淨識と爲すことは古來諸家の說によりて確めることが出來るから、(この點は望月氏とその

說を反す）地論の兩派に於ては、その說と相容れざる眞妄和合の黎耶識を立つる起信論を僞作する理由なく、寧ろ攝論師が同樣の黎耶識觀を立て居るを以て、地論師に對抗せんが爲めに僞作したもので、前の四論文義の文に地論師とあるは攝論師の誤傳であらうと論ぜられた。而してそは初め『攝大乘論』は眞諦によりて南方に譯出せられたが、後、曇遷及び道尼によりて北方に移し弘められたので、此時にあたりて眞諦系の人々が攝論を北方に弘通して地論師をして信ぜしめんが爲めに『攝大乘論』を本とし之に『決定藏論』及び『顯識論』等の所說を加へ來りて、名を馬鳴に假りて私かに僞作したもの、これ「大乘起信論」の名の由來するところであり、是れこの起信論が南方に弘まらずして獨り北方に流傳せる所以であつて、若し强いて僞作者の名を求むれば眞諦の直弟道尼を以て之に擬することが出來るであらうとまで論ぜられた。從つてその譯者に就ても、古來眞諦と爲せど、既に眞諦の飜經論目に見當らず、これを以て法經の『衆經目錄』には之を疑惑部に入れてゐる、或はこれ脫漏に依るとも考へ得るであらうけれど、法經等が編纂の態度を思へば寧ろ之を信ずべきである。費長房の『歷代三寶記』以下、『大唐內典錄』、『開元錄』等、皆眞諦所譯としてゐることは當時起信論の流行盛なりし爲めに費長房が深く穿鑿せずして編入せるを承け繼いだものと察せらるゝ。然し博士は實叉難陀譯の本の由來に就て大に躊躇し、望月氏が『續高僧傳』並にそれを承けたる『同學抄』の說、即ち玄奘が梵譯せるを齎して再び飜譯せりと爲す說を採ることには容易に首肯し難き旨を述べてゐらるゝが、而も、最後に至りて舊譯の信じ難きと共に新譯も亦取るべからず、共に支那にありての僞作なるべしと論ぜられた。

然るに十二月號哲學雜誌に於て博士は更に稿を改めて前說を修補訂正し、項を追うて頗る堂々の論を述べてゐらるゝ。今その要を云へば次の如くである。

（一）、印度に註釋なきこと、『中論』、『百論』の如きは數十の註家ありと記さるゝに、大乘教宣布の第一聲を發せしと稱せられ又重要なる教理を蘊在せしむる此の本論に一の註釋なきは先づその印度撰述を疑はしむる第一點である。註として『釋摩訶衍論』あれどそは僞作なること一般に認めらるれば論ずるに足らず。

（二）、支那に於ける註釋『義天目錄』に出づる三十餘部、並にそれに洩れたる註釋を見るに、何れも隋唐以後にして又北地の人のみである。而してその註者が慧遠、曇遷、曇延の如き地攝二論兼學の人、又智儼、法藏の如き地攝二論より進みて華嚴を興せし人なることは特に注意すべし、即ち南地に弘まらなかつたことを知る。

（三）、『高僧傳』を檢するに、眞諦の傳には『攝論』及び『俱舍論』に關する記事を主とし、全くこの兩論を弘傳せんが爲めにその一生を捧げたる由を記し、起信論に就ては一言も見當らず。又序文を製せりと稱せらるゝ智愷の傳にも毫もその事を記さず、實叉難陀を傳するも起信論再譯に關して何等傳ふるところなし。又嘉祥の如き、その吉藏の名は眞諦より授かつたものであるに、たゞ攝論にのみ注意して本論を疎外し、『三論玄義』に於て印度佛教史を叙して馬鳴を論じながら本論製作に言及せず、その引用に就ても僅かに『寶窟』及び『中論疏』に一二ヶ處を見るのみである。北方にのみ存して南方に跡を留めざる本論が、南方に留錫せし眞諦の譯を爲すことは首肯し難いところである。

（四）、均正の『四論玄義』に支那撰述說を出せることは縱令現存の部に見出し難しといふも、既に珍海及び湛睿の所引によりてその價値を知ることが出來る。且つ現存の本を見るに、毘曇、成實、地論、攝論の四家に對して自家の三論を對辨してあるので、必ず起信論にも對すべき筈であるのに之を見ないのは、又均正が江南の人であつて眞諦譯なるを信ぜざるに由るものと察せらるゝ。

（五）、進んで本文を研するに、起信論は一心二門三大と四信五行とを以て大乘の體たる衆生心に立脚してその理論と實修とを說けるを特徵の一とすべきが、これ頗る明快整正の論斷であつて到底龍樹以前の作と爲すことが出來ない。寧ろその心眞如門は龍樹の思想を顯はし、心生滅門は無著の緣起論を示し、この兩者を統攝合一せしめたるものと見るべきである。と。而して此處に博士は前に攝論師の僞作歟と云つたのを訂正して、北方地論家の南道派にも北道派にも屬せざる第三者の位置にある者ありて兩派調和の爲めに作れるものなるべしと論ぜられてゐる。又本論は『楞伽經』に據りて造られたりとの說は皮相の見であつて、實は『華嚴經』を根本とするものである

と述べてゐらるゝ。

（六）、本文研究の第二として對治邪執分を見るに、その邪執の六種の中、第六の法我見だけは有部宗の見であつて印度に存したものであるが、第一第二の二種は『般若經』及び『中論』『成實論』より來る空執であり、第三第四第五の三種は要するに『楞伽』『勝鬘』の如來藏緣起說より來る有執であつて、印度に於て特に龍樹以前にありしものとは到底考ふることが出來ない。然るに支那佛教史を觀るに六朝以後に宛もこの空有兩系の經論盛に講論せられし事實あり、從つてそれより來る執を所破として成れること見れば本論の對治邪執分は初めて事實上の意義を齎らすこゝ、なるのである。

（七）、本文の修行信心分に於て專念念佛といひ、專念西方極樂世界阿彌陀佛といへる如き淨土敎は印度に於て見出す能はざるところである。龍樹の『易行品』は十方諸佛の名號を稱念するを易行と爲すのであつて、之を專修念佛を明すと見るは親鸞上人の眼光を通して初めて云ひ得るところである。天親の『淨土論』には五念門を明して未だ專念念佛の一行とはなつてゐない。然るに支那に來りて慧遠の無相念佛に對して曇鸞は天親の微意を探り來りて專念を明したので、本論の文の如き實に『讃彌陀偈』に「南無至心歸命禮西方阿彌陀佛」等と繰返したるところを綜說したと見得る、恐らくこの曇鸞系の念佛思想によりてこの說が生れ來つたものであらう。

村上博士は大體右の如き論據によりて本論が支那撰述なるべきを述べられたが、之に對する常盤大定氏の意見を見るに、先づ第一に法經の『衆經目錄』は研究的なる最初のものとして重ずべきではあるが然し之を以て唯一の證權と爲すべきでなく、既に眞諦譯として何人も疑はぬ『無相思塵』、『決定藏』、『解捲』、『部執異』等の諸論を脫洩してゐることの明に不穿鑿なるによりて知るべきである。又此等の諸論は後代の經錄に初めて編入せられてゐるを以て見れば、必ずや同じく眞諦錄中にも無かつたものであるから、起信論だけを疑ふの理由はない。第二に惠均の『四論玄義十』に出せる記事に就ては、その第十が現存してゐるに係らず、之を見出すことが出來ぬのと、湛睿の『決疑抄』引用の據と思はるゝ賢寶の『寶册鈔』に引ける廣文が頗る和臭を帶びてゐることゝを以て大に疑ふ

べきものであり、又たこひそれを價値あるものとするも、そは起信論所說に反對する地論師がその僞作說を捏造せるものを揭げたるに過ぎぬと見らるゝのである。次に眞諦の事蹟を見るに入朝以後間もなく侯景の反あり梁武の崩御ありて後は南北に流離して非常な辛酸の一生を送り、その間に飜譯の業を遂げたので、直弟の間にもその行蹟を審かにする能はざりし有樣であるから、その譯經錄に脫洩あるは自然のことである。勿論攝倶二論の弘通が大趣旨であつたとしても之を以て本論の譯出を疑ふには及ばない。と、而して氏は若し僞作の事實なりとせば何人が之に擬せらるべきかと云ふに就て、當時地攝二論の研究者に就て精細なる論究を試み、終に何人をも僞作者として見出す能はず、萬一あらば當時博學の長老たる曇延、慧遠の如き法將が之を看破する能はずして註釋を爲すといふ如きは到底あるべからざることを論斷せられ、而して最後に本論と『楞伽經』との關係を述べて、たとひ本論が華嚴經によるところありとするも楞伽との內容的連結は何人も否定する能はざるところであり、而して楞伽の骨格を爲す教義は五法、三自性、八識、二無我でありてそこに世親の『佛性論』の說が反影せられてゐるので、起信論も法藏等が第七識を缺くといへど慧遠の云ふ如く既に心、意、識の說あるよりして明に八識建立と爲すべく即ち世親の教義と相通ずるので、楞伽と同じく攝論の後に出來たものであるから、梵本の現存する楞伽を引き放して起信論のみを支那僞作と爲すことは出來ぬと論じてゐらるゝ。

常盤氏の印度撰述といふは無論龍樹以前を指すのではなくその以後のものとして云はるゝのである。然るに村上博士の論議には印度とし云へば常に龍樹以前の馬鳴といふを豫想して、之を駁してゐらるゝ如くである。同じ論據は、以て龍樹以後の印度撰述と爲すに於ても幾くの改竄をも要しない。之に就てなほ一考すべきでなからうか。又常盤氏の論は支那にて僞作の事實ありや否やを穿鑿して見出し難しといふに偏して、印度撰述を成ずる上には單に消極的の論であり、論旨を徹せしむるに確實性を缺くの恨がある。この問題は如何にして解決せらるべきか、兩氏が綿密なる考察を精細なる穿鑿とによりて研究を進めらるゝことは、その所謂學に忠なるものと稱す

べきであらう。然しその所論を見るに何れも支那撰述又は印度撰述こいふことを豫斷してその上に論を進めてゐらるゝを見る。これ恐らく孰れも因襲の念に依るものではなくしてその直觀力に負ふものであらう。史料の取扱の如きはそれによりて如何樣にも導かるゝことは兩氏の論の上に證せられてゐる。實に最後の解決は透徹なる直觀力に俟たねばならぬ。その支那思想であるか印度思想なるかも本論の表現そのもの、上に示されてゐるであらう。之を直ちに明に批判する力を自ら得ることは即ちこの問題が我れ自身と直接なる關係意義を齎らすことゝなる。然らずして若し單に事實の穿鑿に終るならば、閑葛籐の誹を免れないであらう。諸氏の研究が實の意義ある道に進まんことを希ふ。(K、M)

■聖德太子を中心とする記念運動近況

聖德太子千三百年遠忌奉讃會に於て昨大正八年七月に募集した聖德太子御傳及び聖德太子讃仰唱歌用歌詞は應募數御傳五十九、歌詞四百の多數に上つたが、その當選者は御傳一等山田比佐志(福井)、二等江部鴨村(東京)、小林一(埼玉)、歌詞一等堀澤象子(香川)、二等松本俊男(靜岡)、三等守綱啓明(名古屋)の諸氏であつた。一等御傳は幸田露伴氏加筆の上これを公表し、一等歌詞は尾上柴舟氏更に加筆の上、曲譜は東京音樂學校に於てこれを附し普く行はるゝ豫定である。本年度の衆議院議會委員會に於て太子に大菩薩謚號の奏請をしやうこいふことも見えてゐるが、實現されなかつた。一方神道方面に於ては神宮が中心となつて聖德神社創建の企劃もあるやうであるが、未だ具體的には何等の消息に接しない。在來の神社の末社中に聖德太子を祭神とした例を一二擧げた由であるが、これも的確な例證かどうか疑問である。

佛教各宗中で目下太子精神の皷吹に最も力を注いで居るのはわが大谷派本願寺であつて、昨年十月以來着々その緒に就いて居る。各地に太子精神宣傳のため教線を擴張すると共に、刊行物の方面に於ては東本願寺內佛教學會より昨年十一月に『聖德太子と民力涵養』(問題叢書第三編)を出し、本年二月に『聖德太子と國民生活』を發行した。今四月にはなほ記念出版として『聖德太子と眞宗』

を刊行する豫定である。

又四月二十日より三日間、記念法要勤修の期間に於て、派内に於ける太子關係の法寶中屈指のものを本願寺内に陳列し、廣く拜觀に供するといふ計畫もあるとのことである。（正）

■光壽會原典飜譯事業

大谷光瑞氏を推せる光壽會の計企及び其抱負が去二月中旬の各新聞紙に宣言せられた。今それに由ると、漢譯佛教經典は東漢の初より宋元に至る一千有餘年に亘り、西域及支那の各三藏によりて心力を傾竭して譯せられたる支那盛時の文化的所產であるが、民族文化の源泉たる佛教詮表の權威としての佛教經典の原語たる梵語は、古代印度の雅語にして世界に於て語法最も整濟たる優秀な言語であるから支那八代の豐贍な文學を以ても梵文の委曲を傳へることは出來ない、直に之を傳へ得るものは東洋の各言語中我日本語有るのみであるから、「絕えて曖昧模糊の解釋を容るゝ餘地なき梵文佛典の邦文飜譯」を完成し以て、我佛教徒の一大急務を果遂せん爲に、梵文經典、巴利文經典、此等の原典の殘缺せるものには此等經典の忠實なる飜譯たる西藏經典、及佛教文明の背景たる古代印度の法典、科學、哲學等の文獻に至るまで之を研究し飜譯せんとするにある。

英佛獨露等の諸國が印度、中央亞細亞等の經營に着手するや此等諸國の學者は直ちに東洋諸國古代文化の探究に手を初め、地理學に考古學に言語學に、殊に佛教經典の原語たる梵語學、巴利語學、西藏語學、蒙古語學の如き、其原典の蒐集、出版、事彙の編纂、飜譯研究等各國學者の著作實に見るべきものがある、近時我國に於ても此等諸國學者の著作を中心に梵、巴利、西藏語經典の和譯及研究の成れるもの數種之在るは周知の事であるが、更に廣く梵語經典の蒐集に力め、此等梵語、巴利語、西藏語の諸經典を西藏、蒙古及其他の諸譯、並びに我國學者の獨特の研究範圍たる漢譯諸經典と比較研究し日本、支那諸先哲論釋の意に參じ、泰西學者の著作を參考し且批判して日本語に飜譯し、以て日本佛教經典の完成を期することは啻に大谷光瑞氏のみならず、「其使命を負擔しつゝも該方面の研究微々として振はず、二三の東洋佛教

語學の講座の施設有るや、其圖書館に現存の佛教原典の數十種及び佛教言語學の語彙十數種の果して藏せられあるやの疑はる、佛教各宗の大學、專門學校を中心こせる」悲運なる佛教學界宿世の願であらう。

幸に吾人は此世界的文化事業こして計企せられたるものが、日本佛教文化の爲に偏俠なる私情に由つて穢損せらる、こ無く、大法の導くま、に眞摯に進歩せられ、以て佛教研究維新の實現を期待して止まざるこ共に、此難事業の遂行に確信を以て當らんこせらる、光壽會の功勞に衷心感謝する。（益）

會報

◎大乘教理學會々報

大乘教理學會は大乘教理の研究及それに關聯せる學術の研究を目的こし、佛教々學の本質を表現せんが爲佐々木、金子兩教授の指導の許に組織せる學會なり。本會が創設以來開催せる公開講演は左の如し。

第一回。大正八年十月二日。於第二教室、

佛華嚴三昧に就て　　金子教授

大方廣佛華嚴經の表現せる所は佛の華嚴三昧の内容にしてその三昧の意義を明す爲に本經を分拆解剖し、本經は一の叢書的に組織せられたるものを指摘し大無量壽經こその内面的交渉あるこを明かにして論を結ばれたり。

教授數名學生八十名出席。

第二回。十月十五日。於第一教室、

華嚴の修道の研究　　河野教授

華嚴は從來教義の宗教にして純粹の論理こ思惟にて行くべきものこいふ從來の研究の妄を指摘し、行のなき宗教